

小学生の投能力向上に関する教材の有効性

石割 龍太郎 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 南島 永衣子

キーワード：投能力 投球フォーム 下位教材

1. 緒言

文部科学省が昭和 39 年から実施している体力・運動能力調査において、昭和 60 年代を境に子どもの体力低下は深刻な社会問題となっている。特に、ソフトボール投げに関してはその低下が顕著であり、昭和 56 年と現代の男子では、34.8m から 30.5m と約 4.3m の低下がみられる。また女子においても、21.2m から 17.8m と約 3.4m 低下しており、男女共に投能力が大きく低下している。

投げるといった動作はテニスやバドミントン、バレーボールのスパイクなどの動きに通じるところもあり、投能力を向上させることは、他の運動をより有意義に実践していくうえでも重要な役割を担っているといえる。そのため、身体の発育発達途上である小学生において、投に関する動作を習得することは、その後の体育・スポーツを実践していくうえで大変重要である。

そこで本研究では、小学校高学年を対象に、投能力向上に関する教材の有効性を検討することを目的とした。

2. 研究方法

大阪府 N 市立 T 小学校 5 年生の希望者 19 名 (男 11 名女 8 名) を研究対象とした。平成 23 年 10 月 24 日から 12 月 1 日の計 13 回実施し、第 1 回目と第 13 回目は、投能力の測定を行った。

子どもたちは、2 回目から 12 回目までにおいて、下位教材である「べったん」「どすこい投げ」「シャトル投げ」「ターゲットショット」を実施した。なお、投能力の測定については、本研究者が作成したフォーム得点表と遠投距離から投能力を検討した。

データー処理については、SPSS19 for windows を用い対応のある t 検定を行った。また遠投能力と投球フォームについて相関関係をみた。

3. 結果と考察

1) 下位教材における得点の変容

下位教材活用の前後において、いずれの下位教材にも投能力に変化が見られたが、「ターゲットショット」においては統計的に有意な向上は見られなかった。

2) 遠投距離とフォーム得点

下位教材活用の前後の飛距離については、20.4m から 22.4m と約 2m 向上し、統計的に $t=-3.33^*$ と有意な向上がみられた。投球フォームについては、17.2 点から 21.3 点へと得点が向上し、統計的に $t=-6.88^{***}$ と有意な向上がみられた。遠投能力と投球フォームにおいては、正の相関関係 ($r=0.62$) が見られた。

もっとも投能力の測定において、プレテストでは、ファールが 11 個に対しポストテストでは 1 個と大幅にファール数が減った。

4. まとめ

本研究では、下位教材の活用によって投能力が向上することが明らかとされ、また遠投能力と投球フォームにおいては正の相関関係があることが示唆された。なお、これらの下位教材の活用によって、ボールコントロールまでも副次的に習得されることが示唆された。このことから、小学校段階においては、下位教材を多く活用することで、その後の運動経験を豊かにしてくれることが示唆された。

引用・参考文献

高橋健夫 (2005) 体育科教育 53 巻 5 号.大修館書店.